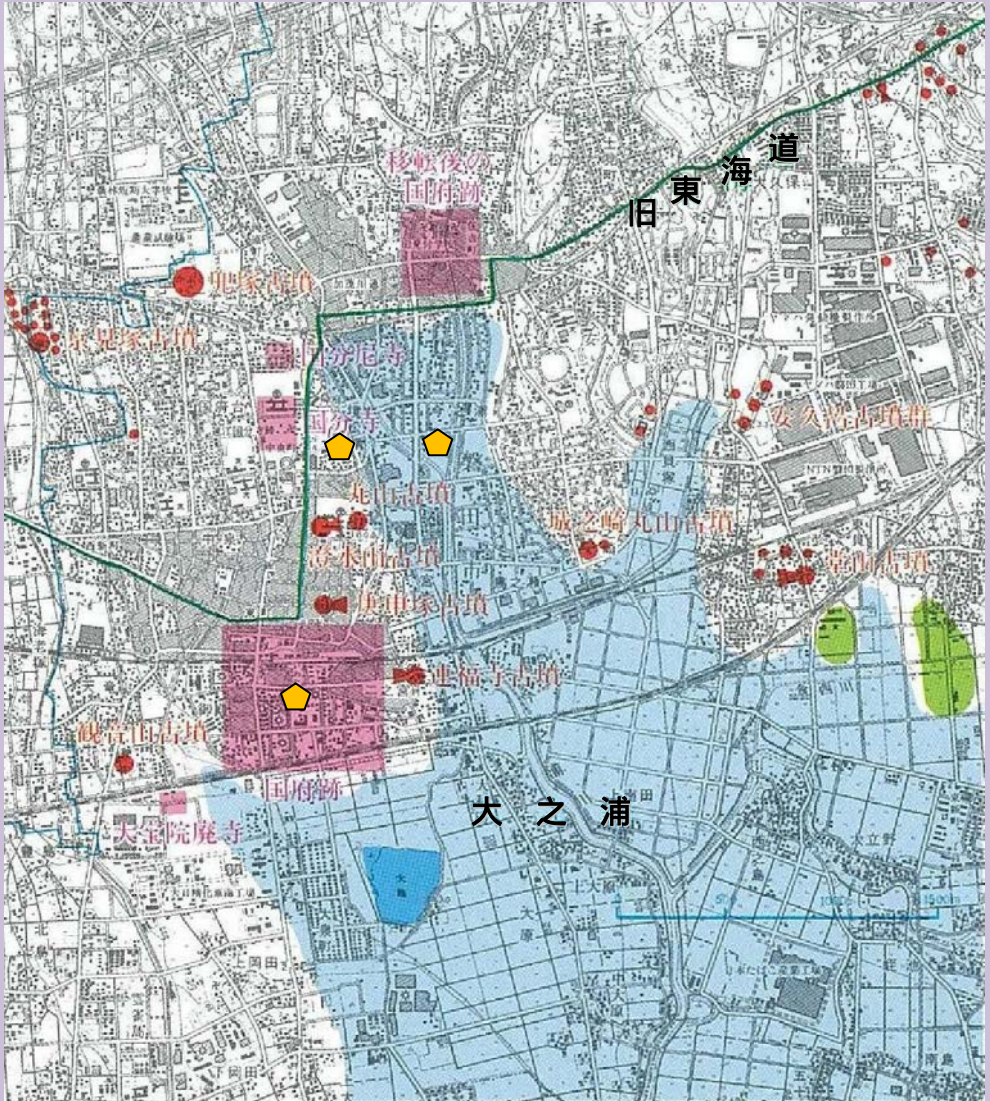


# 磐田万葉歌碑めぐり



注：古代の大之浦の推定地を表しています。

「図説 磐田市史」より

とおほつあふみのかみさくらあのおほきみ  
遠江守桜井王の、天皇に奉りし歌一首

ながつき

九月の その初雁の

はつかり

使ひにも 思ふ心は

聞こえ来ぬかも（・一六一四）

てんわう  
天皇の、報和し賜ひし御歌一首

おほ うら

大の浦の その長浜に

寄する波 ゆたけく君を

きみ

思ふこのころ（・一六一五）



磐田市ワークピア駐車場

【大意】

九月になって初雁の渡って行く頃になりました。(雁信の故事ではありませんが) その初雁の使いによって、東国にあつて天皇をお慕い申し上げている私の心を、奈良の都まで伝えてほしいものです。

【大意】

大の浦の長長とした水際に寄せる波のように、安らかにゆったりとした気持ちであなたのことを思うこの日頃です。



とおほつあふみのかみさくらあのおほきみ  
遠江守桜井王の、天皇に奉りし歌一首

ながつき

はつかり

九月の その初雁の

便りにも 念う心は

(ママ)

聞こえ来ぬかも (・一六一四)

てんわう

ほうわ

みうた

天皇の報和し賜ひし御歌一首

おほ うら

大の浦の その長浜に

きみ

寄する波 ゆたけく君を

(ママ)

念うころ (・一六一五)



磐田市今之浦公園

【大意】

九月になって初雁の渡って行く頃になりました。(雁信の故事ではありませんが) その初雁の使いによって、東国にあつて天皇をお慕い申し上げている私の心を、奈良の都まで伝えてほしいものです。

【大意】

大の浦の長長とした水際に寄せる波のように、安らかにゆったりとした気持ちであなたのことを思うこの日頃です。



かしこ

みことがふり

恐きや

命被り

あす

かえ

明日ゆりや

萱がむた寝む

いむ

妹無しにして（・四三二一）

こくぞう

ちやうながのしものほり

ものへのあきもち

国造の丁長下郡の物部秋持。

わが妻も

絵に描きとらむ

いつま

ゆ あれ

暇もが

旅行く我は

しの

見つつ偲はむ（・四三二七）

ながのしものほりものへのこま

長下郡の物部古鷹。



磐田市御殿遺跡公園

【大意】

恐れ多い天皇の仰せを承って、門出する  
明日からは、萱とともに寝ることになる  
であるうな。いとしい妻も無く独りで。

【大意】

私の妻をせめて絵に描き写すだけの暇が  
あつたらよいのになあ。防人として長い  
旅路に行く私は、それを見ては妻を偲ぶ  
であるうのに。その暇もなくて残念だ。



とへたほみ しるは

遠江 志留波の

いそ にへ

磯と尔閑の浦と

合ひてしあらば

こと かゆ

言も通はむ（・四三三四）

同じ郡の文部川相。  
「ほり」はせつかへのかほひ



磐田市なぎの木会館



【大意】

ふるさとの白羽の磯と今船出する贅の浦  
と一続きであったなら、せめて言葉なり  
と交わすことができるのに。こんなに遠  
く離れては、どうすることもできない。



「遠州海岸」より



# 「磐田万葉歌碑めぐり」

平成 26 年 9 月 13 日

- 協 力 : 磐田万葉学習サークル  
監 修 : 三上達郎 (磐田万葉学習サークル代表)  
発 行 : 磐田市立中央図書館